

この火があのととき……

早乙女 勝元

毎日配達される郵便物が、ひとところとくらべると実に多くなつた。どさどさどさどさとする。開いてみると、なんのことはない。ほとんどがダイレクトメールのたぐいだ。

屑箱に放りこむと、どんどんたまつてしまうので、庭にドラムカンに煙突をつけただけの簡易焼却炉を据えつけて、二日置きぐらいに燃やすことにしている。紙屑だからよく燃える。マッチ一本で火がついて、あとはつきつきと投げいれればいい。

煙突から勢よく天上に昇っていく赤い炎を見つめながら、私の記憶は、ふと三十一年前にさかのぼることがある。

ああ、この火があのとときあったなら……と思う。

こんな考えに私がひたるのは、いささか奇異に思われるかもしれない。知る人は知っているが、私は東京大空襲の炎の中を逃げのびて、奇跡的に一命をとりとめた。なにしろ一晩で十万人もの都民が死んだ。被害の中心地に近い向島に住ん

でいた私にとっては、この夜は忘れようとして忘れられぬだ。火が消えて朝がきて、太陽の下に手はあるか足はあるかと両手を目の前にかざして見たら、あることはあったが、私のはめていた軍手は指先がみな焼け落ちてしまつて、布の部分は手の甲のところだけ張りついていた。その手袋で飛び交う火の粉と、身にまとわりつく火を振り落しながら走つたからである。

火は、あやうく私の小さな身体まで黒焦げにするところだつた。

しかし、その劫火は、たった一晩の出来事だったが、かろうじて生き残つて朝をむかえると、今度は火を求めねばならなかつたのは、なんと皮肉なことだろう。

水中に難をのがれて、やつとの思いで助かつた人でも、日の出とともに力つきて凍死した例がすくなくない。町中みな燃えてしまったのだから、燃やすものがなかつた。たき火は

貴重だった。人垣をかきわけて両手をかざすと、そのぬくもりが全身に及んで、ああ助かったのだ、と思った。

家にかえる。私の家は、どういう風の吹きまわしか、三月十日の空襲では焼け残ったのだが、その日からは火を求めて四苦八苦することになった。台所のガスは、コックをひねってもなにも出てこない。電気は、停電のまま。離れ小島みたいに一かたまりだけ残った家並に、もちろんガスも電気もやってくるはずはない。しかし、それでは煮たきもできないから、焼跡へ燃えるものをひろいに行く。ゴミ箱の蓋が半焼けになって転がっていれば後生大事にひろい、架線から宙吊りになった電柱の焦げたのをはずし、橋の手すりまでもぎとって持ちかえる。これをナタでこまかく割って火をつけるのだが、そのためのマッチがない。紙屑もない。

原始生活に逆戻りしたのと、おなじだった。一本のマッチでも、火をつければ、隣近所が紙屑を丸めたのをバトンのように持ってやってきて、たがいに火を分けあった。

その昔、幼い頃に母から読んでもらったロビンソン・クルソーの物語が、当時の私の頭にあった。たった一人孤島に泳ぎついたクルソーは、火を発見するところから生の道を切り

ひらいていったわけだが、十二歳の私もまたそれと同じ経験をした。一度ついた火は、どんなことがあっても途中で消してはならないから、カマドや七厘の中に二つの目をすえて、たき木をうまく組み合わせ、ウチワや火吹き竹を使って燃やした。

それだけに、炊き上がった大豆だらけのごはんはうまかったと思う。

豆カスやトウモロコシや、さつまいもにフスマカスまで入っていて、みな燃料ばかりを特別に必要とするようなものばかりだったか、それでもなんとか燃えるものを見つけてきては、火をつけた。少量の紙屑にぽつと火がついてたき木が赤々と燃えあがったときのあの感激は忘れられない。

火で死にそこなった私は、その火で助けられた。死にそこなった時間はきわめて短かったが、その後の助けられた時間の長さの思うと、気が遠くなる。

だから、焼却炉に投げこんだ紙屑が、なんの役にも立たずに火煙となって空中に舞いあがっていくのを見てみると、私の心に、ひとしおの感慨が湧いてくるのをおさえようがないのだ。

(作家)